

漢字圏出身の子どもの漢字指導について

日本語を初めて学ぶ外国人の子どもにとって、漢字の学習は困難な壁の一つで、多くの時間を費やすこととなります。

◆日本で生まれ育った日本語モノリンガルの子どものうち漢字を学習する場合、子どもたちがすでに理解していることばに漢字を結びつけていきます。漢字学習は主に、「字義（漢字の意味）」「字音（漢字の読み）」「字形（漢字の書き）」の3つのポイントで捉えられますが、低学年の学習では特に「字形」の指導に重点が当てられます。

	字義→	字音→	字形→	漢字語彙の量を増やす
国語科での漢字学習	既知のことばに、漢字と読み方を結びつけて理解していく。低学年の場合、日常生活の中ですでに知っている漢字もある。学年が進むと、部首や形声文字の学習なども行う。		書き順の指導、字形の指導（とめ、はね、はらい…）、反復練習が一般的な指導の流れ。漢字ドリルの構成も同様の傾向にある。	すべての教科の教科書の表記が、学習指導要領の学年別漢字配当表に準じているので、指導者が特別に意識をしなくても、その学年の学習全体を通じて、漢字を使った語彙の習得が可能。

◆非漢字圏の子どものうち漢字を学習する場合、先ず「ことばの意味」が分かる必要があります。『かんじだいすき』（（社）国際日本語普及協会）や『絵でわかるかんたんかんじ』（スリーエーネットワーク）『Meu Amigo Kanjis』（東京外国語大学）等の、外国人の子どもを対象とした漢字教材では、「漢字の意味」を「絵」（『Meu Amigo Kanjis』は翻訳も）を使って理解させながら、漢字の読み書き指導を行う構成です。従来の国語科の漢字指導の前段階に「絵」によることばの意味理解を挿入する指導は、日本語を初めて教える指導者にとって、馴染みやすい指導方法です。

また、学習指導要領の学年別漢字配当表に準じる指導では、漢字の構成要素となる基本漢字（例えば、口、糸、カ…）を低学年で学習します。こうした指導は、漢字学習が初めてという非漢字圏出身の子どもにも無理がありません。

外国人の子どもは移動が多く、日本国内でも地域によって日本語指導の状況が異なり、指導の継続性が担保されていません。「前の学校で○年生の漢字を学習していた」ということが、前籍校での指導の段階を把握するもっとも単純なスケールともなり、公立学校で学ぶ外国人の子どもの多くは、学年別漢字配当表に準じるテキストで学習していることが多いようです。

	ことばの意味理解→	字義→	字音→	字形→	漢字語彙の量を増やす
非漢字圏出身の子どもへの漢字指導	「ことばの意味が分からない」レベルから学習を始めるので絵や翻訳で、ことばの意味を理解する。	覚えたばかりのことばや、普段使わないことばも漢字で覚える必要があり、時間がかかる場合もある。	音訓を同時に覚えるのは難しく、子ども用漢字教材では、読み方を音訓のいずれかに限定している。主に日常会話で使われる「訓読み」を中心に学ぶ形式が多い。	書き順の指導、字形の指導、反復練習が、一般的な指導の流れ。母国の文字の書き方の影響で、筆順などは習得に時間がかかる場合もある。指導者が細部にこだわりすぎると子どもの意欲をそぐことにもなる。初期段階では、活字（フォント）の種類が変わると対応できないこともある。	外国人の子ども用の漢字教材を終えても、学年相当の漢字語彙の量は圧倒的に少ない。読み替え漢字の練習などを足していく必要がある。
	フラッシュカードの読みやカルタなど、負担が少なく楽しくできる反復練習をすることが多い。文脈の中で、ことばの意味理解をしていく必要がある。漢字を使った文の読みは不可欠。			日本語指導の時間だけでは、漢字の書きを習得することは難しい。在籍学級の担任と連携し、毎日の宿題にするなどの支援が必要。	在籍学級で学習する全教科の教科書のルビ付けなど、学年相応の学習に追い付くにはプラスαの支援が必要となる。

韓国語を母語とする子どもの漢字指導について ～漢字学習における「分かりにくさ」と「分かりやすさ」

韓国・朝鮮語は語彙の5割前後が漢字語で成り立っており、明らかに「漢字圏」と言えるでしょう。そのわけを少し説明しておきましょう。

もともと、日本と朝鮮半島との深いかかわりを通して、同じ中国起源の漢語を共有していくようになりました。

「日本書紀の伝えるところによると、応神十六年に百済の王仁が千字文をわが国にもたらしたと言う。また万葉仮名の用字法には、新羅の郷歌の影響が見られるという説もある。ことほどさように、我が国の文字使用に関しては、朝鮮半島を抜きにしては語れないほどであり、漢字熟語についても共通に用いられる語彙は膨大な数に上る。」(油谷幸利『日韓対照言語学入門』2005 白帝社より)

それだけではありません。日本語-韓国・朝鮮語で同形同義の漢語が多いのは、「幕末から明治初期にかけて、朝鮮では、日本へ留学生を送り日本語を通して速成的に西洋文明を学び入れます。この時漢語の流れが逆転し(それまでは朝鮮→日本でしたが)、近代化を急ぐ韓国・朝鮮において、大量の和製漢語が借用されました。

また日本の植民地統治が開始されてからは、大規模かつ全面的な言語干渉が行われ、1937年の「国語(日本語)常用」政策により一般市民に対して、漢語も混種語も和語も全て日本式の発音のまま使用することが強要されました。」(松本隆『韓国語から見えてくる日本語』2008 スリーエーネットワークより)

こうした経過によって、日本語、韓国・朝鮮語、中国語の3言語間における漢字語彙の共有率(同形同義の漢語の比率)は日-中、韓-中に比べ、日-韓が最も高いこととなります。

しかし、独立後の韓国では「国語(韓国語)醇化運動」が起こり、漢字ハングル混じり文が廃止され、今日もなお固有語の発掘、復活使用が進められています。ですから学校では漢字を正式科目としては教えておらず、韓国では、漢字を知っている子どもたちは大変少ないと言えます。

また、韓国で漢字を学んできた場合でも、韓国で使われている漢字は、旧漢字なので、現在の日本で使われている漢字と同じ形ではない場合があります。

ところが興味深いことに、韓国では10年ほど前から漢字ブームが起こり、課外授業や通信教育による漢字学習が広まっています。漢字と漢字語の知識が、韓国語をより深く学ぶことに役立ち、韓国語をより豊かにすると考える人が多くなっています。就職時の資格として認められる漢字検定を受験する人も多く、教育熱心な親たちは、幼少時から我が子に漢字教育を施そうとしています。

今後、漢字を知っている韓国の子どもたちが徐々に増えてくるのでしょうか。

◆韓国語母語の子どもの漢字学習の特徴

① 漢字の音読みで、類似する音が多く覚えやすいでしょう。

例えば「水」の音読み「スイ」は韓国語では、「ス」です。韓国語母語の子どもは、発音がよく似ているので音読みを覚えるのが早いでしょう。

例：安(アン)、新(シン)、家(カ)、氣・気(キ)、國・国(クック)、未(ミ)、約(ヤク)

② 意味についても同じものを指す漢字語が多いので、ことばの意味を類推しやすいでしょう。

漢字の意味が日本語と同じで、なおかつ発音もよく似ている(同音同義)熟語も多くあります。

例：「家族」(カジョク)、「写真」(サジン)、「注意」(チュイ)、「教室」(キョシル)、「算数」(サンス)、「教師」(キョサ)、「三角」(サンクァク)、「意味」(ウィミ)、「目的」(モクチョク)、「約束」(ヤクソック)

◆韓国からの子どもの漢字学習における留意点

(1) 母語の知識を活用すれば、日本語の習得が効果的であると期待できる場合に、母語訳対応教材で学習してください。例えば、この練習帳で扱われる語彙を母語の韓国語で知らないければ、外国語習得に対する「正の転移」は期待できません。(母語が新しい言語に対してプラスに影響することを「正の転移」と呼びます。反対に「負の転移」=「母語の干渉」が起きる場合があります。)母語の習得・形成が小学校4年生以上のレベルであれば、有効に母語訳対応教材を活用できるでしょう。また、バイリンガルに育てる教育においても役立つでしょう。

(2) 発音が近いため、かえって入り混じってしまうことに注意しましょう。

似たものは差がはっきりしないために、いつまでたっても区別が曖昧になることがあります。

韓国語母語話者では「母語の干渉」を受けて、「教育」を(キョユク)、「地震」を半分入り混じって(ジジン)と覚えてしまうなどの事例もあります。新たに学ぶ外国語として、似ている言葉ほどきちんと覚えるように注意を促しましょう。

(3) 韓国語も日本語も共通して目上の人に使う言葉(尊敬語)があり、特別な単語があります。

したがって漢字も異なります。日本語では「聞く」という漢字は意味が広く、「尋ねる」という意味も含むので目上に対しても使うことができます。それに対して、韓国語では「聞く」に当たることばは耳で聞く時だけに使い、目上の人に対して使う時は別の「尋ねる」という意味の単語を使います。

また使い方のルールで、相手が目上の場合(親、先生、上司)韓国語では必ず敬語を使います(「絶対敬語」と言います。)が、日本語では身内に対しては敬語を使わないというルールがあります。韓国語では、自分の親であっても「様」に当たる文字「ニム」をつけ、先生や上司にも必ず「様(ニム)」をつけ「先生様」「部長様」と呼ぶ習慣です。そのため「様」をつけない「先生」という言葉に違和感があることも、韓国語との違いとして知っておくとよいでしょう。

(4) どの国の言葉も、その国では古くからの言葉(固有語)が先に使われていました。後の時代に取り入れられたり作られたりした言葉と、二通りの表現がある場合が多く、新しい語彙には漢字語しかないものもあります。

この練習帳では、漢字のもつ意味に注目して、韓国の固有の言葉で訳しています。「訓読み」に当たる意味を理解し、漢字が表意文字である良さを多く知ってもらいたいと思います。そうすれば、韓国語を母語とする子どもたちも、漢字文化圏の共有財産として漢字を意欲的に学んだり、活用したりしていけるでしょう。

一方、「音読み」については音に対する感性を養うつもりで指導する必要があります。なぜなら、韓国語では一つの漢字に対する読み方は一通りしかないのが原則であること、韓国語の母音の数が日本語より多く発音が複雑であることが原因となって「母語の干渉」を受けやすいからです。日本の漢字には多様な読み方があることを知らせ、それぞれの発音を聞き分けられるように繰り返し練習させるとよいでしょう。

(5) 同じ漢字語でも、文化背景がちがうと指すものが微妙に違う場合があります。例えば、「門」という漢字は韓国語で(ムン)と発音し、家の出入り口を指し示しています。ところが「戸」という漢字には、当てはまる韓国古来の固有語がありません。韓国の家の作りには雨戸などがなく、戸と門を分けていなかったからでしょう。建具(ドア)を指す言葉は、韓国語では「戸」ではなくすべて「門」という漢字語を使って表わされます(例:窓の戸は「窓門」)。戸籍・戸主という言葉や、転じて1戸2戸と家族単位を数える時に、韓国語では「戸」の漢字語が使われます。

また、日本の学校では一般的に、学級を「1組」「2組」と書き表していますが、韓国では「1班」「2班」と呼ぶので、「班」の漢字語が使われています。

文化習慣によって漢字の使われ方もちがうことを理解し、「あなたの国では何と言うの」などと聞いてあげると、それをきっかけとして、相手の文化を理解する良い機会になるでしょう。

この教材(漢字の練習帳)では、公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)のご厚意により、『かんじだいすき(一)』の構成(課ごとの提出漢字)や読み書きのモデル文のご提供をいただきました。深く感謝申し上げます。

特に韓国出身の子どもが学習しやすいように、韓国語を付け、読み替え漢字についても、情報を入れてあります。『かんじだいすき(一)』と併せてご活用いただければと思います。

作成 JYL プロジェクト教材作成チーム
発行 2012年1月
監修 築樋博子 訳 尹チョジャ